

## 徳川斉昭と伊達宗城(六)

—— 嘉永二年の往復書翰(二) ——

河 内 八 郎

前号に続いて、嘉永二年の残りの分を、十月まで収録する。話題は、海防と、浦賀など江戸湾入口辺の警備問題、松前氏の処置の問題等、前から引続いている幕府の直面する緊急課題をめぐるやりとりが第一である。しかもこの三月十三日、高松藩主松平頼胤(讃岐守)、守山藩主松平頼誠(大学頭)、常陸府中藩主松平頼繩(播磨守)の三連枝による水戸藩主徳川慶篤の後見体利が解かれる。斉昭の「大御所政治」が事実上復活することになるが、それは幕府等公式の政治の場での彼の発言権を一層強いものにしていった。

もっとも、この水戸藩の変化は、藩内の激しい党派対立の中で生み出されたもので、反斉昭派で幕閣の枢要部へ直接結びつく者もあり、一藩内での「争い」ととどまらない関心を内外に呼び起すのである。斉昭と親しい伊達宗紀・宗城父子が、こうした水戸藩情に深い関心を寄せ、事の成行を案じ、斉昭も積極的にその内実を開陳し、理解を求めている。それが本年の書翰の第二の課題であるが、それは、そのような藩内対立が、斉昭の広い場での発言を弱めるかもしれない危険性を持つものであったから、といえよう。

その他、高野長英の短い宇和島滞在が終局を迎える問題等を指摘しておこう。

五七、嘉永二年二月二十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『事修叢書 九下 伊達侯往復書翰』所収、但し、宇和島伊達文化保存会所蔵写本による。

『藍山公記 卷十七』嘉永二年二月二十二日条所収

御別紙難有拜見仕候、然者、去秋以来、呈密翰候処、御委曲御返事被成下、重畳難有、殊ニ御手痛御難儀可被為在候処、別而恐怖之至奉存候、乍失敬相済候儀別段奉復不奉申上候、扱又先頃ハ西洋船軍之画被相下候趣にて、密写申付、本画ハ返呈仕候旨野父より申越、則写も差越候処、洋海戦争之珍奇図ニ而重々難有、是迄一閱も仕候儀無御坐図にて難有仕合、御礼難尽申上奉存候、将又鶴血丸御秘法御伝授被成下候間、申付出来候ハ、可差上旨重畳難有仕合奉存候、最早当春ハ鶴居鳥無御坐候間、明冬製法申付候上進呈可仕と奉存候、扱又右鶴の血を取候義ハ、生血とり候義哉、鎮炮扨にて打候鳥にても宜哉、右之処相伺度、尊書御文意奉推察候所にてハ、生血を取相用候事かと奉存候、此段尚又相伺度奉存候、且腰兵粮之儀相伺候所、御委曲御教示被成下、難有奉存候、兵粮餅被下置、是又御品柄深厚奉萬謝候、永相貯置可申と奉存候、右御製シハ如何様之御法ニ候哉、不苦候ハ、御伝授奉願候、至而便利之御品、殊に弊邑杯峻坂上下仕候ニハ至而便利之儀ニ御坐候間、何卒御伝授相願度、異国漂着城下より人数差出候にも、山坂越候義ニ甚峻峻之場所も御坐候故、右簡略之兵糧平日相備置候ハ、隨身之手当行届、安心仕候儀伏而奉希上候、将又為他出遊歴之儀相伺候処、為相控候様是又奉畏候、同人被苦、此頃別而無異潜居仕候間、<sup>②</sup>乍憚御放念被為在度奉存候、御直被相下、早速伝致仕候処、重々難有仕合奉存候旨、御礼申出候

一、蘭書差出置候処、御書写ニ而延引候段云々御教示奉恐入候、寛々御留置にて宜御座候、和解書三兵活法・兵学小識・鈴林必携、<sup>③</sup>西洋二兵総説、<sup>④</sup>右四部之書物ハ御手に被為入候儀と奉存候得共、右之内萬一御手に不被為入書御坐

候ハ、蔵弄仕居候間、参府御用立可申上哉相伺候度奉存候、近来ハ猥に西洋軍書和解出来、其内にハ偽物多く、油断相成らず候世の中と奉存候、先ハ此段申上度、勿々閑筆仕候、百拜

二月廿二日

宗 城

① 本誌第十二号本稿③の「三一」の「秘方鶴血丸」 ② 宇和島潜居の菊池為三郎らのことか

③ 「鈴林必携」(けんりんひつかけ) Ⅱ上田亮章著、下曽根桂園(金三郎) 関、砲術書、二冊、嘉永五年板行。第十三号本稿④の「三五(2)」(参考史料)の「蘭書目録」に「フロイン著ミリタイルサックブック、鈴林心携之原本」とある。

④ 「三兵法」、「兵学小識」(鈴木春山訳)、「西洋二兵総説」については「五二」の「砲書目」、さらに「三五」註⑦、「三六」註①など参照

内容 一、去秋以来の密翰のやりとり

一、西洋軍船図、義父宗紀(春山)の指示により密写の上返上、海洋戦争の図は貴重

一、鶴血丸製法について問う、生血によるものか否か

一、兵粮餅の恵贈を謝し、腰兵粮の製法を問う

一、貸出し蘭書の返却の件

一、近来西洋軍書の翻訳多く、偽物もあり、注意すべし

五八、(嘉永二年二月か) 徳川斉昭書状 伊達宗城宛

・宇和島伊達文化保存会蔵、伊達家文書、『御重書目録「乙」』の「御書翰類」、状(斉昭自筆原本)

一同右所蔵稿本「御書翰類 第一巻」所収(弘化四年の次に、日付を入れずに収録)

〔斜封紙、ウワ書〕

伊 達 遠 江 守

御 報

水 戸 隠 士

徳川斉昭と伊達宗城内——河内

御別紙ナホ一封落手致候、尚答書遣候故、御序の節御遣し可給候、絵図面ハ写候故、御歸し申候、御落手可給候、御手薄云々何も御申聞之通りニ御座候、其本乱而末治者無ジと申所にて、近海之義も閣一致ニ候ハ、如何ニも可相成候へ共、閣すれ／＼にてハとてもむだ事と存候、虚実ハ如何有之候哉、如夢承り及申候ニハ、一閣にて後宮の権つよく候故、退け可申との由、是ハ一閣のミニハ有之間敷、疑らくハ一閣を落候為ニ、四五ノ閣にて組立候事ニハ無之哉と存候、たを落候為と存候、右策後宮へ響候ハ、後宮有志ハ一閣を向ニ致候敷のよし、全く泉伊②の策敷と存候よくより後宮へも響き、一閣もよくなき人と見え候杯申沙汰のよし、此方奸臣共も一閣をハ嫌ひ居申候

一閣事此節ハ目が覚、打払の論ハ先ツ一閣のミニ候へ共、御承知之通り不決断、泉伊ハ打払以の外の論のよしにて、防候より一閣を退け可申策のよし、松③杯ハ泉近親にて、頼込有之候故、不行届者却て城主等ニ迄相成、五島ハ相伴かと被察申候④右様大政府われ／＼にて、夫のみならず後宮迄一閣を惡ミ候様相成上ハ、何レニ候も一閣ハ危き様被察候処、たとへ退けられ不申候とても、四五の勢つよく、後宮にて一閣を向ニ致候様にてハとても打払杯出し候事ハ相成申間敷候、尚本丹丸杯ハ打払杯ハ本より好不申事と存候へハ、一と四五より申立ニ相成候ハ、我か田へは水を引可申、又一閣万一抜申候ハ、益打払の義ハ勿論、四大名迄も御免ニ相成り、交易初候敷も難計、如何ニも四五の論ニハこまり申候、左様相成候ハ、武備を好候者ハ又々幕不模通りニ可相成、内外上下好家の世と相成り可申哉ニ被察申候、何程一閣退不申内ニ、却て一小事も出来候ハ、拙論の如く其時ハ定り可申敷ニ被察申候、下官杯は本より不行候へ共、三親之中松杯ハ行届候半か、町人同様ニ候処、所厚者薄所薄者厚姿ニ成行候事、今更申ニ不及候、右故御尋之、御立寄之節杯も中々云々申上候処ニハ無之、先／＼御首尾にて御目見、御手より拝領物致候杯、難有と申迄ニ候、御立寄之せつ宰相初娘共下総へ養子⑨ニ遣候も同断終日庭の御供も致候へ共、下官夫婦ハ朝夕御目見のミ故、中々防禦云々等申上候事ハ相成兼申候、畢竟ハ万一申上候様の事有之候てハ不宜云々杯、内臣より本丹丸へ響せ候ニも可有之哉杯と察申候、表向ハ御召連の御人少く候故、乍御氣之毒下官夫婦ハ朝夕一寸御目見のミとの事ニ御座候、但、將軍ニても珍らしき人と、御一同にてハ御氣つまり被遊候処も可有之、かた／＼

の処ニ小臣内一等の奸家よりハ下官義女中計の処へ御共申上候ハ御不用心とか、又ハ何ぞ主意申上候節ハ御指支ニ相成可申抔吹かけ候半故、かた／＼と存候、実否よくハ聞届不申候へ共、内一より左之通り本丸へ遣候との沙汰ニ有之候

一、阿波山横目和田銀之助、并下伊勢畑村里正両名にて、野口村関沢源次衛門より三百金借出候よし

一、高部村新郷士岡本・小室より二百金、国用人大久保甚五左衛門へ指出候由

一、小砂村重衛門、五十両之内廿五両ハ、馬頭村横目星兵衛へ出候由

一、高部村島屋藤藏、先日入湯として出候所、乗下ニ大金入れ候て、内藤<sup>ナリ</sup>藤一郎方へ附入候由

一、薄井井星惣兵衛も出金致候よし、  
郷士薄井友衛門義ハ奸家へ縁者有之候、前文人々何レも物も知等人、新郷士ハ下官退隠後奸家取立にて郷士ニ致候者也

一、家中白石平十郎、同兄玉園衛門等、郷村へ微行致し、此節国家急務と唱、出金すゝめ候由、園衛門ハ小中村民三郎方へ罷越し、所々進め申候よし

一、内藤与力大賀菜助と云者、本郷の公用人ニ出入致し、奸説を入候よし、

本丹も近頃ハ自分にてハ取り不申、家来ニ取せ申候歟の由、万一つき当り出来候節ハ、家

来ニかふせ自分ハ不存ふりのよし

右之通りニ致し、下官御目見をふせぎ申候歟の処、後宮の人々骨折にて、朝夕御目見相成候事ニ御座候、於奸家ハ、さらニ御目見無之候へハ、下官御不首尾のだん、国中へふれ申候へハ、益奸家の勢よろしく、奸人ふえ申候故、左様可致と存候半の処、後宮にて姉<sup>⑩</sup>初尽力致候故、於下官ハ一錢も不費して御目見致候、  
但し、忠臣よりハ定て頼候事と存候へ共、其義ハ不存候 右

故御目見後御首尾のたん、直筆にて頭取<sup>小</sup>姓、小納戸等へ委細申遣候故、国中へ御首尾の義行渡り、折角奸家にて如前文骨折、金子等取集候頼ニも無益と相成候半存候、何も御尋ニ付有のまゝ申進候、御序ニ遠州殿へも御申遣、後ハ直ニ御火中ニ希候也

(奥封ウツ書)  
封固

固

別貴答

御直開

徳川斉昭と伊達宗城内——河内

(別紙小片一枚)

昨年御好ニ付ボウトル少々指上候所、御出来ニ相成候哉如何、乍序御聞申候

① 「二閣」等は、本書の書かれた嘉永二年と考えられる、時の老中で、就任順では阿部正弘(天保十四・閏九・十一)、牧野忠雅(同十四・十一・三)、戸田忠温(弘化二・三・十八)、松平乗全(嘉永元・十・十八)及び松平忠優(同日)である。阿部は斉昭と極めて近く、斉昭が最も排斥していたのは両松平である。「二閣」は阿部で、彼に対する反発が両松平らを中心にあり、水戸の「奸臣共」も反阿部の立場にあること等を伝えている。

② 泉||老中松平和泉守乗全、伊||同松平伊賀守忠優(忠固)

③ 松||松前氏。前号「五六」参照。

④ 松前・五島||嘉永二年七月十日、幕府は、松前崇広と五島盛成(肥前福江藩主)に築城させて辺海の防備を強化させる。

⑤ 本丹||本郷丹後守泰固。大納言(家慶)附側衆から、將軍家慶側衆

⑥ 四大名||嘉永元年五月より、江戸近海防備を特命されている彦根(井伊)、会津(松平)、川越(松平)及び忍(松平)の四家か

⑦ 三親之中松||水戸三連枝の中の高松松平家。ここへは水戸「奸派」の内藤藤一郎が盛んに働きかけて、藩主頼胤を通して慶徳を動かしている模様。

⑧ 宰相||水戸藩主中納言慶篤、斉昭長男

⑨ 下総へ養子||下総は松平下総守忠国(武蔵忍藩主)で、斉昭九男昭休(九郎麻呂)が養子に入る。昭休は、のち病で一たん帰家し、更に鳥取池田家の養子となり、茂政

⑩ 内一||水戸藩士内藤藤一郎業昌(右膳、貞確)

⑪ 以下、地名は何れも水戸領村々

阿波山・下伊勢畑・野口||何れも東茨城郡

高部||那珂郡、小中||久慈郡

小砂(こいさご)・馬頭||下野国武茂郡、現栃木県那須郡馬頭町

⑫ 姉||江戸城大奥の老女筆頭姉小路局、橋本いよ。かつて、老中水野越前守忠邦は、前將軍家斉時代の大奥の肅正を行い、その反発を受けたが、徳川斉昭は忠邦を支持したため、やはり大奥と対立していた。水戸藩の斉昭派は、彼の雪冤を実現するた

め將軍家慶を動かす方法として、老女三保山局を通じて老中阿部正弘と親しい姉小路を動かすべく働きかけ、高橋多一郎愛諸が、奥医師伊東宗益を通じて、彼女に歎願する。

内容（前号「五五」の宗城書状の返書と思われる）

一、一閣、四五閣云々、前号「五五」に閑連。一閣の攘夷・打払いの不決断を非難、一閣を退くべし。

一、水戸藩情―斉昭の雪冤運動に動く斉昭派と、「奸派」とされる結城派（寅寿は弘化四年処分）との対立。結城派の郷士の動き、とくに内藤藤一郎ら彼等が、斉昭派が頼りにしていた側衆本郷泰固へも接近しつつある模様。一方水戸藩主慶篤の三連枝（高松・守山・常陸府中各藩主）後見（前号「四八」註①、「五一」註⑧など参照）の体制も、嘉永二年三月十三日に解かれ、前藩主斉昭も復権する。

一、水戸の斉昭派は、高橋愛諸が老女姉小路への歎願を試みるなど、大奥を通して將軍家慶及び阿部老中を動かそうとした。その動きに対する斉昭の感想。

五九、徳川斉昭筆写書附―嘉永二年三月十三日付、老中連名沙汰書、他二点

\* 宇和島伊達文化保存会蔵、伊達家文書、『御重書目録「乙」の「御書翰類」』、(1)(2)(3) 続けて折紙一枚（斉昭自筆、原本）

同右所蔵稿本『御書翰類 第一巻』所収（嘉永二年の箇所）

『藍山公記 卷十九』嘉永二年九月此月条に所収

(1) は『水戸藩史料別記下、卷二十七』七八〇頁所引

(1) 嘉永二年三月十三日老中阿部以下連名沙汰書

（斜包紙、ウワ書）

「封」

御免書目

表向ニも被仰出候書取二通と一同ニ、左之連名の封書下官江来る

徳川斉昭と伊達宗城（内）―河内

去ル辰年、当宰相殿へ御家督被仰出候節、未御若年ニ付、御家政向之義、三連枝家老共申合可被取計旨被 仰出候処、追々御成長ニ付、右三人共今日 御免被仰出、且尊所様御事、同年十一月中格別ニ御慎深被成御座候付、別段之 思召を以御慎御宥免被仰出候節、御政事向之儀は御携無之様ニと 御沙汰之趣、御連枝共へ申達置候処、此度 思召之御旨も被為在候ニ付、以来不及其儀段被 仰出候、就夫宰相殿以後御心得方之義被 仰出、其段委細以書付御達し申候間、御承知被成候義と奉存候、右ニ付尊所様御含ミ方之儀、近来諸事万事御思慮深く被成 御座候御義共、追々御承知被遊候付、分而被 仰進候ニハ不及事ニハ思召候得共、聊御懸念被為在候義を、御差扣被遊候も、御不本意ニ付、無御腹臆被仰進候、其儀は此度宰相殿御成長ニ付三連枝御免ニハ相成候得共、未御若年ニ被成御座候得は如何程御聡明ニ候共、御大落之御政務萬端御手拔無之様ニは如何可有御座候哉、尤当御家老共義、連枝御免之上ハ、別而精入可奉忠勤は勿論之事ニ可有御座候へ共、一藩之賞罰黜陟及文武御引立方等之義ニ至り候而は、自然御相談被 仰進候義も可有御座、其節は厚被尽御考慮、万事ニ付宰相殿及御家老共御不熟之義を無御構、御一己之御果断等被成候義ハ如何ニ候半歟、可成丈寛大穩当之御所置御肝要ニ而、一躰年来御家臣一和之場を被失候段ハ、決而過不及之御所置無之とは難申ニ付、呉々御配慮之上御相談無御座候而は不相成事ニ思召候、将又御家老中黜陟等之義ニ付而は、昨年中々御文通有之、其段も委細御承知被遊候、且御書中縁辺而已政府ニ揃候義坏、其節之人才により決而無之とハ難申候得共、被仰越候趣も御尤ニ付、既ニ其比讀岐守方ニ及噂候義も有之候、且又戸田銀次郎・藤田虎之介等當時從 公儀御沙汰之品は無之候へ共、一旦御沙汰も有之候上は、再御登用可被成義は有之間敷、其餘御年限ニ而嚴重禁錮被 仰付候者も不少由、右は畢竟越訴其外、不輕所業も有之故、被对公儀候而御申付候場も可有之候、右は御家法も有之、無抛取計ニは可有之候へ共、追々年数も相立候上ハ、何とか一段之御憐愍被加候而も可然候半歟、何も御差図之義ニは無之候へ共、是ハ中山備後守へ可及噂旨 御沙汰之次第も有之、何分向後之義は、當時御聞御家老共を始執法之向



々、假令奸人と被思召候共、御推察迄ニ而、容易ニ御罰し被成候義ハ却而不穩、如何程共御示教有之候而、浄化仕候様可被成ハ勿論之義、且又有志と而已思召候共、兼而被仰越候通、案外結城寅寿之如き、汚御目鑑候様成者無之とは難申、因而是唯々有志而已の推挙も御勘弁可有之義ニ而、兎角派<sup>△</sup>党を被立候御所置有之候而は、始終一和之期は有御座間敷、詰り御家臣たる者御家政之衰廢仕候を好候者ハ、決而一人も無之義ニ付、幾重ニも公平之御所置御急務ニ而、此上 上之御安心被遊候様御取計有之度思召候、右御舍之趣、乍恐難有 台慮と奉伺候間、其儘奉申上候、此段厚御感戴被成、斯 御深懇之御沙汰ニ齟齬仕候御所置無之様精々御心懸可被成候、此段因 御沙汰奉申上候事

三月十三日

阿	牧	戸	松	松
				①

(各種の傍点は斉昭による)

① 阿・牧・戸・松・松Ⅱ老中阿部伊勢守正弘、牧野備前守忠雅、戸田日向守(山城守)忠温、松平和泉守乗全、松平伊賀守忠優、『水戸藩史料 別記下』卷二十七、所引

内容 一、辰(弘化元)年五月六日、斉昭の致仕、謹慎後、新藩主慶篤後見を命じた三連枝を、その役目から解く

一、家臣の「和」を心すべし

一、戸田銀次郎(忠敏、蓬軒)、藤田虎之介(彪、東湖)の再登用は当面不可

一、藩内の「派党」対立の動きに警告

## (2) 老女姉小路書状

下官方勤居候姉花の井①の方迄、極内々姉小路より申来候ニ付、花の井より極密見せ申候書附之写返く時かふ折かく御いとる遊ハし候、めて度かしく

添て御返事申上参らせ候、一昨日ハ細くとの御文、御返事も早そく申上候筈ながら、日々他出致居、延引の御事、御きのとく存候、此程仰出され候御儀、有かたく思召候よしにて、段々御文拝見申、何かと私へも御念の事、有難さ私ニ置候ても有難存候、先少ハ中様御心もとけさせられ候事と存候、しかし峯様江仰進られ候御趣も御座候事、かつハ中様へ伊勢守より申上候趣御座候事故、恐入候事ながら、此うへもか様仰出され候とて、又彼是御つよく御世話御さしつ等御さ候てハ御為ニも相成り申さぬ事と存上参らせ候、ふつゝかの私、恐入候義申上へく筈ニハ御座なく候へ共、御前殿まで御心得と申置候事ニ御座候、又段々と思召もあらせられ候事と存上参らせ候、先く御宜敷事、峯様ニも殊のふか満所くにて、御吹てふも有らせられ候、御まへ殿ニもさそく有難思召候事とそんし候、めて度かし

① 斉昭夫人登美宮(有栖川宮熾仁親王女、吉子)が小石川水戸藩邸に、天保二年四月興入れしたとき、京より伴つて来た老女

花の井は、江戸城老女姉小路(「五八」註⑫)の姉である。

② 中様ニ中納言、水戸藩主徳川慶篤

③ 峯様ニ峯姫、美子、峯寿院、水戸藩先々代(第八代)藩主斉脩(哀公、斉昭兄)未亡人、十一代將軍徳川家斉女

内容 一、斉昭赦免の動きを悦ぶ

一、慶篤の心も解け、峯寿院(慶篤祖母、御守殿)も満足ならん

(3) 伊達宗紀返書写(斉昭筆写)と斉昭の添書

御返事添書

寒の模様委細御咄申上様ニとの事故、極密く申進候、先日御見せ申候てもよろしく候処、両老文通の義、万々一外より洩候へハ、夫こそ以の外故、先く扣申候処、委細ニ御聞被成度との事、且ハ追々御周旋等も有之、不外故大極密の義、無已御咄申上、御覽終候ハ、直ニ御火中希候、右之御懷の処へ、有志共ニてハ共やよろしくと氣ゆるミ申候へハ、以の外故、為・庄之事<sup>②</sup>杯も、先日御咄申候事ニ御座候、一体申發明ニ相成、表向云々出候上は、夫計ニて可然義、又御懸念有之候ハ、是迄のまゝニて御指置ニて可然歟ニ存候、相談致候様ニと有之候上は、善ハ善、惡ハ惡と不申候てハ不相成候処、初ニハ黜、涉等相談致候様云云、後ニハたとふ奸人と存候とも、動し不申様云々ニてハ姑息ニて、何レとも致し兼候へハ、やはり当今奸ニ任せ置候外無之と存候、扱又姉文の中ニ段々と思召も可有之とは有之候処、此度表向ニて云々出候上ハ、此後如何様御指図可被成御辭無之やう被存候

○愚考ニハ、<sup>③</sup>もはや迎も晴天ニ近くと存、右ハ防兼候故、奸家よりも晴候義ハ一同相願候処、其上ニて、下官決斷致し候へハ、指支候故、晴候様ニ相成候上ニて、決斷出来不申様、并有志不被用様ニと手を廻し候ニも可有之哉と察申候、旧冬より結城等相談ニて、山ノ守の僧<sup>本大乘</sup><sup>④</sup>寺の住<sup>④</sup>日華出府、当春下り申候、虚実ハ分り兼候へ共、法華ハ当時

御城ニて不被用候故、両山を願云々とのよし承り候事も候へき、さて又姉よりの文ニ、イセ云々有之所、御内意を老中連名ニて申聞候を改可申筈ハ無之候処、左候へハ連名も其本後宮よりやはり出候事かと察申候、相談致し候上ハ、正法を不申、よき程ニいたし居候てハ、下官職名を取申候故、又段々思召有之候上ハ、格別、何相談申来候共、奸まかせニいたし置候外無之候、ハクにて奸を信用する事の甚しき事、如何いたし候者かと存候

○連名の中ニ、両田登用云々と有之処、ハクにて御免ニ相成候上ハ、如何様用候とも御かまゐなくて可然義、既ニ紀州の山中、筑後杯もハクより嚴重被仰付候へ共、御免の上ハ又再勤も致候、有志を惡ミ給ふ程御徳をハ損候と

も、御益ニハ相成間敷敷と存候、其上両田義ハ下官家督の節より、不一通、先ニ御覽被遊候との事ニ候処、右ハ鈴木石見守を 大御所様ニて云々御過被遊候を、其砌奉伺置候処、是ハ隠居以来、又々用達家老ニ相成候へ共、以の外人望を失ひ居候人ニて、 大御所様御目利、御尤ニ御座候、右之節御一同御見及被遊候事と奉存候所、両田事下官家督の節ハ国ニ居候て、御目見ニハ出不申、右等の義ハ暫指置、連名の中ニ再御登用と有之義、再勤の事ニ候ハ、再勤と認可申、又上ケ用候事ニ候ハ、挙用抔認可申を登用と認候義、上ケ用候てハ不宜様ニも相聞え、又ハ江戸へ出候てハ悪しき故、用候とも再江戸へ登せ不申事とも相聞え候処、御考如何ニ御座候哉、愚考ニハ、老中の方ニてハ善惡相分り、御免ニ相成候上ハ、再用候とても不苦候へ共、後宮天辺ニて云々故、再江戸へ登せ候てハ、御目懸ニも相成候故を恐れ、何レとも聞え候やうニ認候かとも被察候、尤直々上ケ用候事ニハなく候へ共、右登用の処不相分候故、貴考を御聞申候

○其他云々、何様越訴等重き事ニも候半か、上へ対して弓を引候抔とは違ひ、下官よりハ申兼候へ共、臣下の身として下官の為云々申出候ても、当重役ニ取次候人無之上ハ、越訴の処も無已、譬ニハ如何ニ候へ共、右の通り主君の為を致し候か、悪しきニ相成候てハ、ハクニ万一如何様の事有之候とて、天朝へ云々越訴致し候先ハ有之間敷、他家の忠臣を嫌ひ給ふハ、則我忠臣を失ひ給ふ事ニ至るべし、 東照宮の御時、武田より御小姓を指上置候処、夜中御寝の節御小用ニ御被為入候を不知して、御夜具の上より二刀三刀さし通し居候を、御通り候て御覽被遊、御自身御捕被遊、御側臣<sup>キ</sup>を呼候故、皆々驚、直様死刑ニ可致よし申候へハ、 上意ニ是ハ武田ニても名有武士の子也、主君の命ニて我等を殺さんとする、我ニ不忠なれ共、主君ニハ忠也、若皆々の子供へ我等申付候ハ、ケ様可致候、左候へハ可殺者ニ非ス、帰し候やうニとの 上意ニて、又々上意ニハ幼年なれハ路遠ニ指支可申候へハ、馬ニ乗遣候様ニとの御義ニて、帶刀をも渡し、馬ニのせ被帰候よし故、 東照宮の御家臣、御仁恵并忠臣を思召候義ニかん

じ、益忠勤を心掛候事也、下官よりハ申兼候へ共、下官の為ニ歎願いたし候とて、尤と思召ハ格別、惡ミ給ふべき  
訳ニハ無之やう存候へ共、天辺當時の有様と存候

○右之通りの有様故、下官晴候上ハ正政ニ相成可申処、同様とて御誹謗無之やういたし度候、愚昧の下官立入候て、  
世話致候てさへ不行届候ニ、ましてハ表と裏と有之次第ニてハ、逆も善政ハ行れ不申候、くれ／＼も此書ハ御覽後  
直ニ御火中可被下、万一外ニ洩候節ハ、下官為計ニ無之、貴家の御為ニも不宜候、追々御懇ニ御申聞も有之、不外  
存候故、極々密々御咄申候事ニ候也、御火中／＼

○派党云々も、前より少しハ有之候へ共、下官の代ニ相成一切相止候処、辰年ケ様被仰付候より、派党をハクより御  
こしらへニ相成候ニこまり申候、此上立入世話不相成候へハ、尚々党ハ出来可申候

○案外如結城云々、不存して毒を食候ハ無已候へ共、奸と存なから用候ハ、毒を知て毒を食ふが如くニ候歟、御指図  
解兼申候」夫共ニ若ハク、貞水或本丹等賄路取為ニ暇なとも可有之歟

尚又、中両老文等ハ御懇意の人多ク共、一切此御事ニ付御咄し被成間敷候

① 前掲(2)の、姉小路と花の井両老女間の文通

② 為・庄＝宇和島滞在中の水戸藩士菊池為三郎と某庄兵衛、十二号(三)の「二五」註①(以後も多出)

③ 「愚考ニハ」以下は、斉昭の添書

④ 大乗寺＝駒込にあり、反斉昭派として活動。弘化二年十月、鈴木重矩(石見守)、太田誠左衛門(資春)ら一四名とともに、  
斉昭より阿部正弘に、処分に付すべく願出らる。『水戸藩史料別記 下』巻二十六参照。

内容 一、斉昭の大奥への働きかけについて、伊達宗紀の忠告

一、斉昭の意見＝赦免の喜びは大なるも、

今回の謹慎解除は、「奸家」よりも手を廻し、「有志」の者を排除しようとしたものであること  
結城派の出府も盛ん、後宮よりの指示にもよるものなり

岡田（戸田・藤田）再登用禁止とは、「再勅」の禁の意味にはあらず  
派党も以前ほどの対立にはあらず

六〇、嘉永二年三月十七日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年三月十七日条所収

御密啓謹読仕候、不順之候御坐候得共、閣下被為揃益御機元能被為在候段、乍憚恐悦無量奉南山候、然ハ過十三

日ハ阿閑より云々御達御坐候由、誠以宇内一統再奉 御忠誠御徳輝 御開運に被為至候御儀、無上恐悦之御儀、

天朝公辺之御幸福と不堪欣躍、難有奉存候、早速に為御聞被成下候段、恐入難有奉存、擬右ニ付奸家窮鼠の勢、勝而

兜の云々御卓慮御儀御海量之程感激之至奉存候、為其卒忽の儀無御坐様可仕旨、此儀ハ乍憚可易貴意と奉存候、早速

飛檄にて申遣候、如何計か難有狩り候半と相察申候、為念板源へも穩便潜居可仕旨申遣、宮崎へも家来遣、密示仕置

候、実ニ大切の御機會に候得ハ、上下謹慎第一の御儀と奉存候、寛徐の御処置肝要と奉存候、姦人の胸裡如何と推察

仕候、丹後<sup>④</sup>の麦も余かんにさわり、如月初旬より枯縮候様子、第一可賀儀に御坐候、一角も右にてハ持れ申間敷やと

も奉存候、尚々御模様奉伺度候

○有栖川宮尊筆の儀ニ付、尚又被仰出候趣奉恐入候、右程にも御教示被成下候御儀ニ付、然ハ奉願度、縑絹追而差上

可申と奉存候

○陣羽織地へ 尊詠御揮毫の儀奉願候、白地にてハ見苦敷候間、御手元ニ而染立被仰付候上、御染筆可被成下候思召

ニ付、襟裾の切も差上候ハ、一時に染被仰付候由、誠に 御染毫<sup>希</sup>申上候すら恐入候処、右様染迄も被命候段、

深々恐縮千萬奉存候、乍然 思召通り被仰付被下置候ハ、無此上難有仕合奉存候ニ付、則切地差上奉り候、乍恐  
宜敷奉願候

○元陵御記、板倉方にて上梓仕、先頃御手に被為入候儀と奉存候、右にハ米にて書載仕候分除御坐候、是ハ岡本近江守  
書記仕候処、尤の様に奉存候間、先頃の御本御書載被為在候而ハ如何可有御坐哉、奉入 尊覧候、尤思召次第此本直  
に御留被遊候而も宜敷御坐候、将又板倉儀も乍不及御開明の儀ニ付是迄心配も仕居、僕よりも相頼候儀も御坐候処、  
実意に周旋仕居候き、此度の恐悦奉伺、早速馳、寸楮同情奉欣悦候段申越、乍恐台下へも程能奉申上候様申出候間、  
此段奉申上候、下きん儀も同様申出候ニ付、奉奏候、扱又下きろふの儀ニ付、又々此節姦より申越候儀も御坐候ニ  
付、被召抱候段幸の御儀、御不自由に可被為在、旁申上候、被為任候段奉畏候、早速下きんへも申聞候得ハ、無此  
難有狩り恐入奉存候段申出候

○綿葉製法の儀ニ付申上候得ハ、尚又御卓論御教示被成下、奉感服候、何分手の懸候儀にてハ莫大に予備仕候儀御出  
来不申儀、洋夷ハ何そ工面の御坐候儀と御同然愚考仕候、被為出来候ハ、追而拝領可被 仰付候旨難有相樂居申  
候、僕も両三度製候処、不如意に御坐候、出来の末ハ可入笑覧と奉存候

○詠官櫛林某も先日出府仕、蘭書相応持越申候、少々私儀も藏得致候含にて、当時専ら見合最中に御坐候、兼而御注  
文被為在候分ハ、最早御藏弄被為在候や奉伺度、私取入候分ハ追而可申上と奉存候、先ハ不取敢恐悦申上度、御請  
旁申上奉り候、恐々頓首百拝

暮春十又七

宗城

賢明老公閣下侍史中

敬白、此一封板源より奉呈度旨申出候間、差上申候、已上

徳川齊昭と伊達宗城内——河内

① 三月十三日、幕府、水戸家三連枝の慶篤後見を解く。(前掲「五九(1)」参照)

② 板源⇨水戸藩土板橋源介常裕。祐筆、江戸小石川水戸藩邸にあり、水戸との情報交換にあたる。

③ 宮崎⇨未詳 ④ 丹後の斐⇨本郷丹後守泰固(「五八」註⑤)

⑤ 「元陵御記」⇨靈元天皇(御水尾天皇第十二子、承応三⇨享保十七、在位は寛文三⇨貞享四)が法皇時代に、享保六年九月から同十六年十月まで、毎年春秋に修学院離宮で飲宴奏樂の遊行をした記録「修学院御幸宸記」のこと。

⑥ 板倉⇨板倉伊予守勝明、上野安中藩主、奏者番(天保十四・十一・十五⇨同十五・五・十八)。「元陵御記」に序文を附して嘉永元年三月板行。伊達宗紀が、左近衛權少将藤原宗紀の名で、題字を書いている。

⑦ 岡本近江守成(忠次郎)、勘定奉行を経て、天保十四・五・十槍奉行、嘉永三・十一・一卒「五六(2)」註⑦参照。

⑧ 榊林⇨代々の長崎通詞、先に寛政十一(一七九九)年三月、水戸藩彰考館総裁立原翠軒に招かれた榊林重兵衛がいる。

内容 一、三月十三日の水戸藩三連枝後見役解職の「達」を悦び、各方面へも伝う。

一、有栖川宮尊筆の件

一、陣羽織地へ揮毫願いたし

一、「元陵御記」板倉方にて上梓

一、下曽根召抱えの問題

一、綿襷製法の教示を謝す

一、通詞榊林所持の蘭書

六一、嘉永二年三月十八日 伊達宗城書翰、徳川齊昭宛

\* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年三月十八日条所収

二伸、時下不順候、乍憚御自玉專要奉願候、拟又先日相伺候銃書、右ハ何レニ可有之哉申上候様奉畏候、取持之者ハ承知不仕、海陸必要之銃書中、第一之書と申事故、甚朝暮渴望被罷在候、何分御吟味之上相伺候奉存候、ゼーアルチ



ルレリイ之訳書も被為在候半、何卒拝借奉希候、且又先年華国之本書紙拝領仕候処、楮質甚宜敷候間、大銃早打ニ相  
用候シユンドルス並ニペービーイ杯ニ至極宜敷、只今ニ相用申候処、当年埴邑之上ハ、数度打試為仕度処、右之残不  
足ニ相成候間、何分少々御恵与之儀奉希度、御庇廕ヲ以業前為仕候と奉存候、此等之趣相願度候、恐惶頓首

暮春十八日

藤原宗城拜

密啓拜呈

乞親拆

① 「銃書」ニ具体的な書目未詳

② Zee-Artillerie「海上砲術書」、第十三号「三三五(1)」の「訳業必要書籍目録」参照。高野長英は「未タ全備之訳ハ相成申  
間敷ヤト奉存候」と記している。

③ シユンドルスススナイドル銃、フランスのミニエー銃より順次改良された英国銃  
④ ペービーイ杯・ポックス(胡椒入れ)型銃、英国製の短銃で六連発

内容 一、銃書の所持者判明せずも、是非入手したし

一、「ゼーアルチルレリイ」の訳書は拝借いたしたし

一、先年拝領の華国の本書紙、大銃早打に都合良し。残り少なき故、更に恵与されたし

六二、嘉永二年三月二十日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

\* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年三月二十日条所収

別紙板伊にて上梓之元陵御記、過日微臣より致一覽候、扱々感心なる事ニ候、序も有之候ハ、宜御伝へ可給候、尚又  
此度岡本書入本二冊右用にも候ハ、直様留置不苦候由、深情令多謝候、彼も世に有名之者ニ候得者、任御申越可致

徳川斉昭と伊達宗城宛——河内

収蔵候、扱又務州序文<sup>③</sup>、令銘肝候処、天子之儀ハ某陵と唱候義、宋人之隨筆扱ニハ有之候半か、書名ニ致候事ハ西土ニモ例如何可有之哉、西土之例ニハかまゐ不申候へ共、本朝ニハ尚有間敷、靈元天皇之御事とハ中々聞え兼候半歟、東照宮之事を芸祖と認候儀、天子之御記之序ニハ不相当ニ可有之哉、尚又国歌之盛云々如何いたし候者歟、尤文面ニ歌とのミハ認兼候半故、不得已義とハ存候へ共、歌とさへ申候ハ、本朝之歌ニ可有之、腐俗之儒扱西土ヲ我国の如本存候者ハ、本朝之歌を措て、国歌拝認申候へ共、日本魂有之務州我神州之歌を措て国歌と認候ハ謬誤ニモ候半、不得其意事と被存候、西土之歌をハ唐歌と社申へけれ、貴兄ハ陣羽織ヲ舶来之品を乍嫌、虎之絵を被付候如く、愚昧之拙者腹ニ落不申候、尚又無遠申候ハ、第一天子御記之頭書ニ評認候儀、如何可有之哉、恐らくハ失敬ニハ当り申間敷哉、未熟読ハ致不申候得共、先任心付申進候也

三月廿日 嘉永西也

遠州殿

齊 昭

参

- ① 板倉勝明編・刊の靈元天皇「元陵御記」Ⅱ「六〇」註④・⑤
- ② 岡本近江守成Ⅱ「六〇」註⑤。板倉の序文には、「元陵御記」二巻を岡本より見せられて感動した、とある。
- ③ 務州序文Ⅱ未詳なるも、板倉の序文の記事を批評しているので、「務」は「豫」（板倉伊予守）の誤読か。

内容

- 一、「元陵御記」、家臣より入手一覽し、感服せり
- 一、岡本書入本二冊、留置き、利用されたし
- 一、題名及び「務州序文」の記事の難点
- 一、陣羽織の絵柄のたとえ

六三、嘉永二年三月二十五日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

＊『筆脩叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年三月二十五日条所収

尊翰拝戴難有奉謹読候、如 高諭不順候御座候処、先以 至尊閣下倍御壮栄御多祥被為在、乍憚恐賀至極奉南山候、  
扱又先日御請書指出候節相願、貴国漉之玉箋並ニ珍奇之一品被相添被下置、重疊難有仕合、御礼無尽于拙筆、毎度  
御懇篤被成下、品々拝領、就中此残ハ統術ニ相用候義、恐縮之至候得共、当秋迄ニ新造大銃出来仕候ハ、此残用具  
ニ仕、打試可仕と重々奉万謝候、僕より進呈仕候、産鰯御賞味被成下候由、本懷之至、難有仕合奉存候、其外御懇  
諭之趣奉恐入候、先ハ御請奉申上度如此御座候、只今刺技仕居、別而乱書深々奉恐惶候、頓首百拝

暮春念五 即御請

御端啓難有奉拝見候、乍恐不順候、閣下御自玉為民社專要奉存候、将又銃書ハ知承仕候、アルチルレリー訳書ハ  
御吟味可被成下旨難有奉存候、僕儀も重々相尋候間、萬一取出候ハ、内密奉入 電覽候儀御座候、恐々不備

宗 城

閣下

御請侍史中

内容 (何れも「六〇」、「六一」、「六二」参照)

一、国産の漉き紙の用箋及び「珍品」下附を謝す

一、秋までに新銃を製造し、紙の残部を使用せん

一、鰯進呈への礼状に恐縮

一、銃書の入手

一、「アルチルレリー」訳書

徳川斉昭と伊達宗城内——河内

六四、嘉永二年四月二十日 徳川斉昭書翰、伊達宗城宛

・宇和島伊達文化保存会所蔵伊達家文書、『御重書目録「乙」の「御書翰類」』、状、（斉昭自筆原本）

同右所蔵稿本『御書翰類 第一巻』所収、（但し、安政三年四月二十日とす）

『事修叢書 十下 伊達侯往復書翰補』所収、但し、同前

（年代を、『事修叢書』写本の通り、嘉永二年、として、ここに入れる）

（斜封紙、ウツ書）

「封

伊達殿

水隠士

参

（1）（安政三年のものか）

如諭、薄暑之節、無御障御参府、令大賀候、八代姫義ニ付縷々被仰越、忝存候、未幼年、且教訓も不行届候へハ、甚心配いたし候、未御逢も無之哉、御同家之義ニも候へハ、御心付之義ハ何分御申聞有之様いたし度候、右御歎として、貴邦之寿累め御投恵、毎度御懇篤之義、令多謝候、乍微小領所之鱒二尾、報好意候也

四月廿日

水隠士

伊達殿

二白、御端書之趣忝存候、簾中へも御伝声申聞候所、忝御礼之義ハ尚又よろしく申進候やう申聞候、不尽

御別紙之義云々、何も承り申候、早々とらえ相成候やう、御工風有之度候、過日豚兒よりも申進候よし咄承り申候、定て申進候事と存候、御火中

註 伊達家文書の現物は、（1）及び（2）以下の三通を、斜封紙の中に包んであり、この四点は一つのもので整理され、稿本『御書翰類』にもまとめて、安政三年四月二十日付として収録されている。しかし、（1）は、内容から考えて安政三年

四月と考えるべきである。一方(2)以下は、(1)とは別に一つの封書となっているもので、日付が無いが、斉昭の雪冤問題、尾張家の継嗣の他、松平美濃守よりの燭台、有栖川宮の揮毫所望などの内容から考えて、嘉永二年の、四月～六月のものである。次の「六四」宗城書翰の返書と考えれば妥当と思われるが、一応「四月二十日」のところに置く。

① 参府Ⅱ伊達宗城は、嘉永二年は、四月二十七日に江戸を發ち、帰国、閏四月二十五日に宇和島着で、この記事と矛盾する。安政三年は、三月十一日に国元を出、四月九日に江戸着で、「御参府」に符合する。

② 八代姫Ⅱ斉昭女、孝子、天保十二年生。嘉永二年は九歳。安政三年には十六歳、安政三年四月に、仙台藩主伊達慶邦(文政八年生、天保十三年襲封、安政三年三十二歳)に嫁す。この点でも、本書翰は安政三年が符合する。

③ 御別紙以下Ⅱ安政三年の書翰は、何れ紹介するが、その四月、脱藩逃亡せる「奸派」の谷田部藤七郎らの逮捕を、水戸藩主慶篤より大坂町奉行等に依頼している。

内容 一、無事の参府を祝す

一、八代姫への配慮を謝す、尚、仙台とは同家故、種々の助言を依頼  
一、するめの礼。水戸産の鱸二尾を贈る。

## (2) 別紙

(斜封紙、ウツ書)

「別 答

封 封印

御別紙逐一承り申候、阿姉等云々、内外表裏之義竊ニ愚考候ニ、天にてハ寒を信しられ候を、阿初五角ニて云々申、  
漸々はナミ位ニも出候のかと被察候、実ニ天明ニ候へハ、以来正政ニ致し候様云々無之候てハ不相当の所、たとへ寒  
と存候とても云々坏、統て五角ニても指支たる認方ニ相見え申し候、寒ハハクニ手廻り居、天ニても寒を信られ候  
故、五角よりつよく申候ハ、五角も危くと、右之通りと被察、宰未若ニ而、一藩の賞罰黜涉及云々と有之上ハ、其後

の義下官へ相談無之候てハ不相成筈ニ候処、当役人共ニテハ表向の御達等有之、品ニよりと申所、右をとらへ、役人ニテ相談決兼候品計、又ハ御立寄の節の為、庭の手入杯ハ相談ニても可然杯申候よし、右ニテハ一藩一和致候様ニとの処へハ叶不申、只品ニよりと申所のミをとらへ申事ニ御座候、扱表向右様出候上ハ、家中一同相談致候半と存可申処、追々相談之義、役人ニテ防候義承知致候ハ、又々國中穩ならぬ様ニも相成哉と心配致候、扱又左様の節ハ、下官方ニハ兼て相談之節尽考慮、家中一和致候様御達有之候等、如何と申様ニ相成、相談も不致候て、罪ハ来り可申、さてくこまり候事ニ御座候、何レニ致候ても、当天の氣候六ヶ敷時ニ御座候、何レニも訳不分、実々明時と存候、ケ様の明時、又とハ有之間敷、誰も彼もあきれ切候事と存候

○崎陽漂客杯、かひたん中人ニ不相成、歸し候様ニも相成候ハ、又所々へ漂着くくと申ニ及可申、対州の牛云々、対州計ニハ無之、追々所々ケ様可相成候、実ニ当御代よりケ様被遊候儀、対 天朝、天下へ対し御申訳無之やうの事ニ可相成と恐入候事ニ候へ共、寒を信しられ候明時無已事ニ候

○此度紀も逝去ニ相成、跡四才、尾も逝去ニ相成、実ニ辰年以来三家の難事不幸と存候、幕の御為潔存上候、下官ハ御不首尾、下官を遠け、父子の間を割候奸臣ハ信られ、海防等の義ニ厚く心を用候人ハ、天狗とて御嫌、右に返し、先年海防の御達三家へ出候を、下官方ニテハ今ニ達不申様の人ハ、たとへ奸人と存候ても容易ニ伝不申様云々のつり合、右ニテ考候へハ、幕御人とても、上の事を存上候人ハ悪しく、御不為をも不申人のミ御首尾ニテハ、事有之節如何して御勝利可有之哉、恐入候ニ御座候、扱尾の跡如何相成候哉、其後簾中又々痘瘰、尤輕症ニテ、来朔日方、さか湯の祝のよし、紀の養女ニ相成候へハ本清水の時也、紀逝去ニ付、忌中と有之処、直ニ忌解ニ相成、人々誹謗申候、扱又田を天より御世話之処、田ニても御免願候よし、又尾国臣ニても、田ニ相成候ハ、国の金穀一切出し不申云々申張候よし、右ニ付一橋云々の沙汰有之、万一此方へかけ合等有之候ハ、一度養子ニ行、外ニよき口有之

とて、右を捨行候ては不相濟と止可申存候所、一橋家臣何レも御免願候よしにて、不及其義、先ツく安心致候、右ハ何レも成瀬等<sup>⑧</sup>にて目論、天より御沙汰のよし、右ニ付候ニハ、尾より撰の三男を簾中へ取合候含にて、撰へ申入候所、三男ハ撰あまり秘藏ニ無之者歟のよしにて断、自分にて可相成よしニ御座候、十二分九リン迄定り候歟のよし、尤成等ハ撰を好不申、外ハ是迄若年計にて、上下をつめ、役人のミ勝手致候故、此度ハ是非撰ニ致度由申候歟のよし、若年寄内藤とか申ハ尾より養子ニ参り候者にて、是等も主張いたし<sup>⑩</sup>を尤撰も相成度、手候処、国許にても左様存候事ニ候ハ、穩方可然とて撰ニ相成候歟のよしにて、来朔日さか湯相濟候へハ、追々発可申手統のよしニ御座候、中務ハ御承知の通り、本腹ニハ候へとも、二羽より内室来候故、尾へハつれられ不申、三男十九才を簾中へ取合候歟のよし、簾中ハ十四才、未婚礼ハ無之候へ共、撰尾の養子相統と相成候へハ、簾中ハ母ニ相当り申候処、右を三男の簾中ニ致候義、如何致し候者ニ可有之哉、右之妹七才の人有之候へ共、是以養子ニ相成候へハ、三男ニハ大叔母ニ相成候へハ、外の養女ニも不相成候ニハ如何と存候、一躰先の尾州、田へ養子ニ参り、田の娘を簾中ニいたし、二女ハ脇腹ニハ有之候へ共、当尾州ハ先尾州の兄弟ニ候へは、先尾の娘を簾中ニハ致し兼候故、清水の養ニいたし取合候処、又尾逝去ニ付、撰養子ニ相成、右簾母ニ当り候を子の簾ニ致し候義、如何ニも正論にてハ決兼候事ニ御座候、乍然バク・尾等にてハ、近頃訳なしの政行れ候へハ、此度ハ如何相成申候哉、世評にても無之やう致度事ニ候、撰ハ一兩年以前より隠居内願にて、此節隠宅普請之処、前文之義出来候故、登り度相成候義、是亦凡俗の情のかれ難き事ニハ候へ共、相成候上も評判よろしく候へハまたしも二候へ共、御承知之通り、世才ハ有之、榮・舞・三絃等何にてよろしく、又人付合もよろしく、世の中にて申通人にて、婦女子ハ勿論、俗人杯ハ賞候半か、有志ハ如何可申哉、縁も有之候人の事故、別て苦勞ニ存候、扱右様相成候ニ付てハ、此方も撰之内室ハ下官より参り候故、右様相成候へハ、又一入費と存候、当人ハとくニ隠居の心得ニ有之候処、今ニ相成、尾へ行候義

甚心配のよしにて、日夜なき明し候よし、尤撰はかくし居候へ共、外より自然存候よしなり、極密承り申候、扱撰義ハ下官よりも年上にて、何様よくさへ有之候へハ、上の御為ニも可相成候へ共、前文之通りの通人にて、有志へハ有志らしくつき合、奸人へハ奸人相応につき合、詩歌も出来能、はやし・娛樂迄も出来、夫々ニ致し候故、一寸ハ人つきよろしく候へ共、一体の志、為　皇朝夷狄を防禦致し候義ニ昼夜心を用候義ハ如何可有之哉と被存候、善人ニハよミせられ、悪しき人ニハ悪れんと申にて見候へハ、誰ニもかニもよきと被存候ハ、却て如何なる者かと存候、又撰の実父一眼にて、一生此方ニ居候との事故、召使申候女も顔のミにて召抱候故、車力の娘を他の養女ニいたし置候処、右腹にて撰ハ出来申事にて、至て下賤の母人ニ内々ハ承知ニ候へハ、是等も不申ハよろしくと心配致候、扱尾の家ハ、代々五郎太と申か通名ニ有之、是ハ初代の尾州度々子を失ひ候故、車引の丈夫なるを見候て、あやかり候為ニ、車引の名を聞候へハ五郎太と申候よしにて名を付候よし、左候へハ、此度は、実の車引の娘かうミ申候子、尾ニ相成候ハ相当ニ可有之哉、一笑く、是等ハ下官杯ケ様の事申候義、万一尾へ聞候てハ以の外、極々御内々ニなし可被下、御心易ニ任せ申候、扱尾と相成候ハ、是迄も御一席御心易き事と存候へハ、何分御教示にて天下の為ニ相成候やう致度事ニ御座候、神祖の御血筋ニ近き人ハ勿論、無左候ても、御血筋有之人ニ候へハ、御家門の中誰ニてもよろしく候へ共、只天下の為ニ相成候人にて、神祖の御徳をけがし不申やう致度事ニ御座候、直々御火中く

尚又申候、拙家前文之有様にて、当役人共政事の義一切下官へ不申候中ハ、きく・せう杯容易ニ出現致候てハ以の外故、何分潜居致し居候やう御頼申候、又来年共相成候へハ、追々当役人の中奸人をも退け候やう相成可申、とかく大事ハ遅成と申候へハ、早く致し候は、却て不宜と存候、何分きく・せう共加養致候やう御申付ニいたし度候、此後御出府の節迄ニハ、何とか工夫致し、御逢も相成候様いたし度事ニ御座候、夫も彼も拙家役人ニ御座候、奸人



揃居候内ハとても六ヶ敷、又一二抜候へハ、追々正面をかむり候人も出来、又次第ニ奸勢薄く相成候事と存候、何レ此後の御出府を相待申候、何分御養生、御出府無滞様ニと存候

○有栖へ御頼の品、額字并懷紙共、近日御頼申上候様扱申候

○松美<sup>⑬</sup>よりの燭台、右ハ船中にて用可申品と見え、磁石ハ常の品を中へ置候へハ相分候様の工夫と存候、右之上ハ鉄炮と存候処、通し穴無之にて、如何と存候処、若夫と知れ不申為、わさく穴明け不申のか御序の節松美へ御聞可被下、若御聞無之候ても、貴兄御承知ニ候ハ、後日入道殿より成とも御申聞ニいたし度候、尤合図位ハ、穴無之候ても不相成事ハ無之候へ共、穴有之方便利と存候、若右様の事ニ無之、外ニ何そ有用之品々可有之哉、不才不相分候故、御聞申候

○一、此神仙解毒ハ何レニも有之法ニ候へ共、下官方ニての制ニハ格別能有之よしニて、人々賞候故、御道中御用意ニもと内々手元ニ有之候分進申候、暑当り、又魚・鳥等の毒ニ当り候ニ、鮫ニておろし、用候て、尤功能有之候、可相成ハ一ツきくへも被下候様ニと存候、御覽後、早々御火中

(奥封、ウワ書)

「封

密 答

① 御別紙ニ各項目、次の「六五」の宗城書翰との対比

② 寒ニ奸ニ「奸派」、水戸藩内の反斉昭派のこと

③ 阿、五角ニ「五八」註①等参照

④ 宰ニ宰相、参議、水戸藩主徳川慶篤、弘化三年十二月一日任参議、天保三年五月生、嘉永二年十九歳。

⑤ 紀ニ嘉永二年三月二十七日、徳川斉彊(十一代將軍家斉男)死去、三十歳。閏四月二日、弟菊千代ニ慶福襲封、四歳。(のちの十四代將軍家茂)

- ⑥ 尾<sub>11</sub>嘉永二年四月七日、徳川慶滅（よしつぐ）（田安斉匡男）死去、十四歳。  
 ⑦ 後掲の系図の如く、尾張家は代々、徳川家斉の子が田安家を経て入っている。今回も田安家から養嗣子を入れるべく動きがあった。一方、紀伊家は、やはり家斉の子が、清水家を経て入っている。  
 ⑧ 成瀬<sub>11</sub>尾張藩附家老、尾張犬山城主、三万五千石、成瀬隼人正正住  
 ⑨ 撰<sub>11</sub>尾張徳川家支流、美濃高須城主、三万石、松平摂津守義建（系図(3)参照）。  
 五月七日、義建男義恕（五・朔、掃部頭となる）へ尾張家養嗣子の内意が伝えられる。『慎徳院殿御実記』巻十三、当日条）  
 ⑩ 内藤、当時若年寄に、内藤氏は該当する者が無い。尾張家からの養子についても、内藤家へは無い。  
 ⑪ 中務<sub>11</sub>松平義恕は、天保十一年、従四位下、侍従、中務大輔。  
 ⑫ 二羽<sub>11</sub>丹羽。義恕は、弘化四年十一月十三日、陸奥二本松城主丹羽左京大夫長富女を娶る。  
 ⑬ 尾張家先代、家斉男、はじめ田安斉匡養子となり、その女猶姫を娶る。死去した当代慶滅は、田安斉匡の男。  
 ⑭ 松平摂津守義建室は、水戸徳川治紀女、規姫。斉昭の姉にあたる。  
 ⑮ きく・せう<sub>11</sub>菊池為三郎、某庄兵衛  
 ⑯ 松美<sub>11</sub>松平美濃守、福岡藩主黒田長博

参考系図

(1) 紀伊徳川家

|| 斉順  
 家斉男  
 文化七、清水家嗣ぐ  
 同十三、紀伊家養子  
 文政六、襲封  
 弘化三死、四十六歳

室紀伊治宝女豊姫

|| 斉温  
 家斉男  
 文政十、清水家嗣ぐ  
 弘化三、紀伊家斉順  
 養子・三・二十七襲封  
 嘉永二死、三十歳

室近衛忠熙女豊子

(2) 尾張徳川家

|| 斉温 || 斉狂  
 家斉男  
 天保十死  
 田安斉匡養子  
 弘化二死、三十六歳

室田安斉匡女猶姫

室田安斉匡女猶姫

慶滅  
 田安斉匡男  
 弘化二、斉狂養子  
 同、尾張家嗣ぐ  
 嘉永二・四・七死、十四歳  
 昌丸  
 弘化四、一橋家嗣ぐ  
 同、死、二歳

## 尾張徳川家支流美濃高須松平家

天保三、襲封  
文久二、死

室水戸徳川治紀女

規  
矩

文政元、婚

室丹羽左京大夫長富女

武成

天文政八生

天保十三、鶴田松平家養子

一 整三郎 天死

一女夭死

義比（茂徳）

容保

弘化三、会津松平家養子

一、水戸藩内「奸派」の動向と、藩主慶篤の対処の不安

一、漂流民の受取りと、対馬での外国船員の動き

一、紀伊家・尾張家当主の相次ぐ死去と、その継嗣のこと。特に尾張家の継嗣内定者松平摂津守（美濃高須藩）義建男義

恕への不安

一、尾・紀・水、御三家の危機

一、高須松平家と水戸家の縁故

一、菊池為三郎らに会いたし、その機会を待つ

一、有栖川宮へ依頼の揮毫

一、松平美濃守より宗城經由で贈られし燭台につき質問

、  
神仙解毒剤を送る

徳川齊昭と伊達宗城(六)――河内

## (3) 附属小片 (1)

本文へハ認落申候処、精工感心致候故、御序之節、是亦御申遣し可給候

一、拙製之兜、如何ニ候へ共、貴兄迄御見せ申候、不苦ハ松美へ御遣しニ致度、七日御立のよし、箱等申付候も間ニ合兼候故、其まゝ廻させ申候也

内容 一、松平美濃守に贈る兜の件

## (4) 附属小片 (2)

呉々も、燭台ハ無穴して用候のか、又ハわざ／＼夫と知れ不申為に穴を明ケ不申のか、又下官考の如く、合図等の品ニ無之、何そ外ニ用候品か、御申聞ニいたし度候、又穴を明ケ可申をわざ／＼明ケ不申のニ候ハ、此方ニて可然明ケ申候故、承り申度候、○序ニ申候、先日ノ綿葉、未品揃兼試不申、試ニて出来候ハ、貴邦迄御見セ可申候

内容 一、松平美濃守よりの燭台の件

一、綿葉試作未だし

六五、嘉永二年四月二十三日 伊達宗城書翰、徳川齊昭宛

・『事修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年四月二十三日条所収

先日ハ御密啓被成下、謹而奉拝見、難有奉存候、甚多擾罷在候間、恐入候得共、必要用の御儀計御請奉申上候、阿姊よりの御別紙奉密読候処、実に内外表裡不可解御儀と奉恐入候、右ニ而ハ当分別て被遊にくき御儀と奉恐察候、然し姦惡輩転覆の奸策ハ中々気支有御坐間敷と奉存候共、内外よりの御文通、主意ハ藤々輩の策か妨候而と可惡可愛御儀

御坐候、右等之儀ハ阿ヘハ激論も仕度候得共、此時節其儀ハ相控、只奸策之為に内より転覆不仕様に有御坐度と重々申談、其儀ハ受合候趣、中々当節左様之儀ハ無御坐安心可仕旨申聞候

○登用云々、右ハ御挙用不被為在様にとの儀と奉存候、江戸出府を御と、め申上様にと而已ハ不奉存候、且又此間ハ上り屋入之九人も御免に相成、先々無此上都合と為 御国家奉大賀候

○崎陽亜墨船<sup>③</sup>、從來漂客迎に参候旨申上候ヘハ、漂人ハとく御帰じ為相成儀と被思召候処、只今まで崎陽居候や申上候様、右ハ一昨年松前より崎陽ヘ送達、一昨蘭船ヘ被仰付被差帰候都合候処、カビタンより御断申出候由、それ故只今迄滞崎仕候、一兩度逃出し、其後ハ入牢に相成候由、一人ハ縊死仕候由御坐候、右加比丹連帰候儀断候ニハ意味御坐候事と奉存候、此度相渡し候儀もかびたんを中人に被相立候而ハ不本意に奉存候、彼是面倒筋歎願可申出と奉存候、如何相成候哉、未タ帰帆之義も承知不仕候、琉球へも最早可参と奉存候、対州ヘハ上陸中野牛盜取候由、番見なから其儘に仕置候由、扱々残念に可有之儀、最早対州も危き事ニ奉存候、尤是ハ極機密ニ而御坐候間、其思召ニ奉願、追々奉申上候半、可憂儀御坐候

一、此度指上候燭台、実ハ松美濃より私ヘ到来仕候間、私より差上呉候様、先日相頼申候間、奉呈進候にて、先年弘道館碑頂戴、福分二枚遣候間、右御礼の心ニ奉存候、全燭合計にも無御坐、少々工夫御坐候拵方ニ御坐候、博多鑄造に御坐候得共、甚精工感心仕候、御左右御用にとも相成候ハ、本懷無限奉存候

一、玉海返呈仕候間、跡拝借奉願候、私出立後ハ入道より相願候半と奉存候、廿七日にハ出立仕候、何そ不相替御秘密御用も候ハ、被仰付度奉存候、実ニ又一年ハ度々奉伺 御動静候儀にも不相至、御側を別れ候心地仕候而、心細く奉存候、何も取込居、乱略奉呈寸楮恐入奉存候、恐々誠惶頓首

四月廿三日夜八時燈下

密枢要御直披奉願上候

宗城百拜

① 阿娣よりの「別紙」これは、嘉永二年三月十三日の老中阿部以下の達書〔五九〕(1)及び、四月十四日、水戸藩が会沢安以下九名の禁錮を許したるものの、蟄居は解かぬまゝにしたことを、「不可解」としたもののか。

② 藤々水戸藩士内藤藤一郎業昌。斉昭退隠後、高松松平家へ出入りして、反斉昭的立場で行動する。〔五八〕註⑩

③ 嘉永元年五月、西蝦夷地に漂着して、松前昌広より長崎に送致されたアメリカ捕鯨船員一五名のこと。第十三号「三九」参照。嘉永二年三月二十六日、アメリカ軍艦プレブル号 Peble が長崎に来航し、身柄の引渡しを求める。三月五日退帆。

④ 松美濃〓福岡藩主黒田斉博(薩摩島津重豪第九子)

内容 一、水戸奸家一派の動きによる、不可解な処置は納得し難く、阿部老中へ激論いたしたき心情なり

一、「登用」の解釈問題〔五九〕(3)〕

一、長崎にて異国船へ漂流民引渡し送還のこと

一、長崎滞留異国船未だ帰帆せず、対馬にて上陸、牛盗取りなどありしということ残念なり

一、松平美濃守よりの燭台を呈上す。それは弘道館碑頂戴の礼なり

一、「玉海」返呈。あとの分拝借願いたし。帰国出立後は、入道(養父宗紀)より願候わん

一、四月二十七日出立帰国の予定。今後一年は、動静を伺うことができず、心細し

六六、(参考書翰) 嘉永二年五月十四日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

・『聿修叢書 九下』所収、但し、同前

『藍山公記 卷十八』嘉永二年五月十三日条所収

(1)

過日は御別紙<sup>①</sup>にて御教示被成下候趣、具ニ奉謹誦候、松之一条モ委曲被仰下、其外奉拝誦候、乍恐逐一御同然ニ奉存候、北松所詮如只今ニテハ此後御為ニハ難相成、国替之外無之義と奉存候ものゝ、只今趣ニ而は左様之義被 仰出間

敷、日増北松柔弱ニ相成、金銀ニ而何も相濟せ候様ニ相成候事と奉存候、何共致方も無之、公辺ハ勿論 天朝ニ奉対候而ハ恐入候御事と、私杯ニ而奉氣支上候事ニ御坐候、近海之此節渡来船一条も、<sup>②</sup> 扨々御不安心至極之事ニ乍憚奉存候、委曲御承知も被為在候通之次第、島々ニ而乱妨等致候事、其儘被差置候てハ、此後愈相慢、度々渡来無疑所々測量も仕、愈 皇国之趣賞握仕候様相成、不日ニ御不安心相生し可申、廻船等ヲ洋中ニ而奪取候時ハ関東之運送米其外相絶候様可相至、西国ヲ始メ一同恐縮致、不遠回船も無之様ニ可至、右様相成候時ハ、忽チニ関東困究此上差迫り、外国ハ閼禍自蕭牆相生し可申、其間ニ乗し又々渡来船は申様ニ至候時ハ如何共 上ニ而も被遊方有之間敷、相考候程薄水ヲ如踏恐入候事絶言語候、段々相考候而ハ、逐一如 尊命御同然乍憚奉存上候事ニ御坐候、此節諸儒考も御尋御坐候由、去年歟筒井杯へも存慮御尋も有之奉言上候由、此度も御尋御座候処、別段考無之、去年歟奉言上候外ニ、別段ニ心附無之と申上候趣も内々承知仕候、右之筒井存寄書等も取御評議も無之哉、勘定所へ相下り居候而、格別取、猶又利不利等再応同人へ御尋も無之哉ニ承知仕候、実ニ御為奉存候而、筒井申上候義ニ而、至而尤なる存寄之趣、外々ニ而申候間、重々閼老衆ニ而骨折、直ニ評議も有之度ものニ御坐候、扨々恐入候事ニ奉存候、船出来候事并扨打等ノ事、仕候、右様ニ而ハ奉言上候而も骨折損と申様ナルモノニ御坐候、扨々恐入候事ニ奉存候、船出来候事并扨打等ノ事、有志ニ相論、一日も早く発しニ相成候様ニとの義云々奉謹読候、如 尊命一日も早く有之度と奉存候得共、當時之形勢ニてハ何分ニも六ヶ敷可有之、其内事夷船乱妨も致候、実ニ御不安心之義ニ付而ハ、諸大名よりも猶又有志輩御為を奉考候而ハ、只々相黙シ居候も、不本意之事と奉存候間、一同心附等及言上候様ニ相成候而も可然事ニ乍恐奉存候、如何ニも只今之形ニ相濟候而ハ、此上如何舛の御心配之義も乍恐夷船仕出し申間敷ものニ無之、御威光も弥増落候義、歟敷事ニ奉存上候、此度之渡来船ニハ余程閼老も心痛之趣承候得共、所々ニ相拘り候而英断出来兼候事と奉存候、縦令御条目ニ御坐候而も、此御時節船無之而ハ難相成候ハ、御造りも可被成、一旦扨打被相止候而も、不法ヲ仕候

夷狄人御坐候時ハ、打払も可被遊事ニ奉存候、左程御六ヶ敷事共作恐不奉存候所、何分不肖之考故歟、絶而夫等之処難解、只々御氣支奉存上候事計ニ御坐候

一、御書付拜見、難有仕合奉存候、則奉返上候、外々迄同様之事ニ候得共、從外承候書付一冊奉呈 尊覽候、此冊子ハ何卒御覽相濟候ハ、御序ニ御返し被成下度、乍憚奉希候、又外も何等承り候ハ、可奉言上旨奉畏候、此後承候ハ、可奉言上と奉存候、且又遠江守事も此節ハ着邑可致旨奉蒙 尊命、難有仕合奉存候、疾ニ着邑仕候事と奉存候、未愈着邑之使者も不致參着故、日限ハ不相分候得共、多分去月一杯ニハ帰邑仕候事と奉存候、何等珍書も候ハ、差上候様、早速在所へも申遣候処、指出候ハ、早速ニ可奉差上と奉存候、此節余ニ可奉 尊答事無之候得共、過日之御請猶再応奉言上候、甚乱筆落字等恐入奉存候、萬々御海恕奉願候、恐々頓首

五月十四日

再曰、奉入 尊覽ハ、書付同様ノ事ニ御坐候内ニ、前ノ詠歌御一覽迄ニ奉差上候、頓首

① 御別紙「五八」の伊達宗紀宛齊昭書翰。松之一条「松前氏の件

② 例えは、嘉永二年正月二十日、英船琉球久米島に座礁

同二月八日、英船、難船迎えのため久米島に来る

同二月十八日、三月七日、外国船、折々隠岐沖・能登沖に出現す

同二月中、外国船しきりに対馬海を通航

同三月十七日、アメリカ捕鯨船、久米島に来る

同三月二十六日、アメリカ軍艦ブレブル号長崎に来航

同三月中も、外国船対馬周辺にしきりに出没

同三月八日、十日、外国船隠岐沖・能登沖に出現

同閏四月一日、英船一艘琉球那覇に来航



同閏四月三日、外国船二艘對馬沖、竹島附近にあり

さらに閏四月中は英國軍艦マリナー号 *Mariner* が関東近海に出没、十日に浦賀に上陸、十二日に下田に入港、測量

③ 筒井＝筒井肥前守政憲、西丸留守居。嘉永元年五月四日海防策を上申する

内容 一、松前家問題の種々の教示を謝し、逐一同感に思う

一、松前家國替の他なしと思うも、今のところその義なく、逆に賄賂で済ます動きにて、幕府のみならず朝廷に対しても大問題なり

一、この節近海に渡来する外国船しきりなり

一、北方諸島にては、異人の上陸乱妨、測量等が続発し、不安なり。更に、洋上にて廻船の運送米等の奪われんを恐る

一、諸儒者についての尋ね

一、造船、ならびに異国船打払いは、一日も早からん事を説くは尤もなれども、仲々困難なり

一、異国船の乱妨等の続発せる折、諸大名は沈黙を破り、積極的に意見を言上すべし

一、今回の渡来船は、幕閣も処置に心痛する様子なれど、決断不可能ならん

一、入手の「書付」一冊を呈覽す。読後返却されたし

一、遠江守（伊達宗城）は、国元に到着せしならん

一、詠歌を呈す

## (2) 別紙

再曰謹呈仕候、段々夷船渡来致候処、度々乍恐日本之手当向ヲ相輕シ候様相成可申、浦賀辺ノ御手当向も今一層夷狄ニ見透サレ不申、何分ニも寄付候事不安心ニ彼方ニて存候様被成置度、浦賀辺井伊家来等台場も山ノ鼻ニ有之由、海上よりハ能見へ、目当と可相成、其外万事急卒ノ間ニ合候様不被遊候而ハ、甚御不覚ニ可相成、此度下田へ着船致候而ハ、諸家人数下田迄相廻り候様之事ニテハ、萬々一夷船一発致し出船致候而ハ、其所ヲサエノ間無之、甚恐入候事ニ候得ハ、御手ユルキ事ニ奉存候、所々海防之國ニも有之事ニ候得共、急卒第一只今ノ專要イカニモ 御膝元ノ近海

御手薄く、乍恐 將軍家御膝元ヲ不憚ハ如何ニも御威光之薄キ事ニ可至、甚恐入候事ニ奉存候、其外ニも数条申上度事も御坐候得共、先長文ニも相成、相扣申候、余リ不安心之義と奉存候間、先此段申上候、御覽後迅速御火消奉願候、恐々謹答

五月十四日

① 浦賀台場ニ文化文政時代の異国船来航ひんばんな時代、文化八（一八一）年、江戸湾入口各地に砲台を築造したうちの一つ

② 嘉永二年閏四月十二日、英国軍艦マリナー号下田に入港、十五日、港内を測量、乗員柿崎に上陸す。十七日下田を去る

内容 一、異船警戒の策に疑問。浦賀辺の井伊家の台場等も、海上よりよく見えるは、異船の側より氣付かれ下田等へ廻る恐れ

ありて良からず

一、下田入港の英国軍艦の対策に不安

一、その他にも不安の条々あり

六七、嘉永二年五月二十日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『事修叢書 九下』所収、但し、同前。

『藍山公記 卷十八』嘉永二年五月二十日条所収

(1)

謹而密楮拜呈仕候、追日暑氣相増、南海令程暑、計管七十八九度之候御坐候處、閣下倍被為揃御勝常御興居可被為在、宇内萬福恐賀無量、奉南山候、拟爾後是不奉伺 御動靜、背本意恐縮多罪之至奉存候、御海恕願敷候、將又近日如何被為在候哉、委曲相伺度奉存候、乍恐ケ条書にて奉申上候

一、先頃ハ御封内之御賞罰及文武御引立等、相公より御相談可被為在旨、五閣より申上候ニ付、右之義其後御内話被為在候所、御役人より申上候ニハ、御家老衆の筋へ御内合無御坐候故、御相談不被為在様申上候ニ付、相公中々被為在御配慮、被為在御三度も被為減、小梅へ御退隱ニても被成度と被仰候由相伺、誠に御孝心之無止尊慮と感涙仕候御義御坐候き、右ハ内奸等、公御政務へ御口出し被為在候時ハ、是迄之奸曲事発革可仕と、其処氣遣にて御とめ申上候義と奉存候得者、扱々可惡義奉存候、其後ハ如何之御都合被為在候哉相伺度、阿闍等より先頃後ハ萬務御家老衆よりも尊慮被相伺候上にて被取計候や、相尋候ハ、是非〳〵御相談可被為在義と、其所渴望仕居申候

一、梅天雨湿之候御坐候処、兼而之御手臂之御痛如何被為在候哉、何分御加療被為尽度、其他御惣躰ハ御壮実之御義と難有、安心奉申上候得共、尚亦委敷奉伺度候

一、下きん娘ハ罷上り候事と奉存候、如何御坐候哉、追々御坐右之御用にと相立候ハ、於私も安心仕候

一、有栖川宮御染筆之御義御願被成下候由、重畳難有仕合奉存候、御礼之義ハ追而相願候半と奉存候

一、異船の義聞及候儀御坐候ハ、可申上旨、奉畏候、東西南北の義、就中北辺之事ハ何事も聞得不申候得共、隣国土佐之國東寺崎と申所地方より三里程沖、当月二日異船相見得候処、直ニ辰巳之方へ乗行、帆影見失ひ候由、為知越申候、弊邑東海洋面ニハ相見得不申、定而亜墨船広東辺へ往來の船と奉存候、他國如何や被為聞候御義御坐候ハ、相伺度奉希候、当年ハ冬迄ニ東西南海門へハ渡來可仕と奉存候

一、蘭書、当春藏弄仕候分申上候、則左之通御坐候、外ニ而取入候者承込候ハ、奉申上と奉存候、松修理大夫も取入申候、御尋被為在候ハ、可申上と奉存候、私發東時分ハ、いまた書名書留出來不仕候き

一、プロイン ミリタイル サックブツク<sup>③</sup>

一、ニウエンホイス<sup>④</sup>

一、コンス、ゲリースキユンデ 治療書<sup>⑤</sup>

一、松美濃守より呈候燭台之義ハ、私義発東前ニテ、紛擾罷在、不得寸隙候間、野父より申上候様申置候ニ付、定而可被遊御承知候得共、尚申上候、右ハ全美濃守大銃鑄造之工ニ御坐候、細工より銅之熟候所を入 尊覽度由御坐候き、燭台ハかりそめにて、実ハ百目不足の置筒に御坐候、火門を不突ハ一寸見候処、武器と不見得様趣工仕候ものニ御坐候、此段奉申上候、頓首百拜

密奏拝呈

① 下きん下曾根金三郎、第十三号「三九」註③参照

② 松修理大夫島津斉彬

③ プロイン=A. W. de Bruijn: Militair Zakboek (兵書)、第十一号「一二(2)」高島四郎大夫蔵書目録、及第十三号「三

五(2)」にあり

④ ニイエンホイス(辞書)、同右、及第十三号「三五(1)」高野長英訳業必要書籍目録」にあり

⑤ コンス=コンスブルユフ著、ケネースキユンデ ハンドブック(内科書)、第十一号「二三(2)」にあり

内容 一、水戸藩内諸情を案じ、其後の動向を問う(「五八」・「五九」参照)

一、梅雨どき、臂痛を見舞う

一、下曾根金三郎娘奉公の件

一、有栖川宮尊筆下賜依頼

一、領国及土佐への五月二日の異国船接近を報告

一、蘭書所持の報知

一、松美濃(黒田)よりの燭台、実は小型大砲なり

以別紙奉申上候、兼而御伝受被成下候鶴血丸出来仕候間、乍些少奉入 電覽候、甚鹿製、其上始而故、不束之上藥劑調和も如何と唐突呈候処ハ、恐怖の義御坐候得共、兼々御沙汰被為在候間、差上申候、追々相試候上、尚効驗可奉申上と奉存候、鶴ハ冬分沢山故、当冬ハ多分製候心得ニ罷在申候、拟又海防之義、未タ手も当年ハ不下候得共、此節砲台ハ洋製ニ擬造仕度と、専ら雛形取建罷在申候、将又硝石ハ去辰年より造硝石存立丘も仕込、当春より製手始仕候ニ付、甚少々なから入 貴覽度、洗水再製も他所にてハ不仕処、此度為仕取得候間、是又入 尊覽候、自然生ハ不珍候得共、序故差上奉り候、造硝石ハ六間半之室にて七拾六貫目程製得申候、何分可否之御沙汰奉希候、考にてハ天然生と相替り候義ハ無御座候、却而製候時ハ塩氣ハ薄き方に御坐候、盛に取候様相成候得は、甚弁理ニ奉存候、定而華国にても御造製御坐候半と奉遙察候、火藥不足にてハ、非常之節ハ差支候義に付、当今彈丸藥杯專一相貯候含ニ罷在申候、シキートウアル御製被為出来候哉相伺度、何卒其内拜見奉願候、恐々謹言

五月廿日

密呈

① シキートウアル = Schilt-Haouwer, Hoey: Verhandelng over het fuskruid (火藥製法説) か、第十二号「一二(一)」  
「高島四郎太夫所持蘭書目録」にあり

内容 一、製法教示を受けたる鶴血丸の試作品を供す

一、砲台建設計画を進め、雛形を造る

一、硝石(火藥用)も、去る辰(弘化元)年より仕込み、当年春より製造着手、試供す。その製法を開陳  
一、シキートウアル(人名、火藥製法書著者)の製法を問う

(3) 別紙(2)

為・庄共至而無異潛居仕候間、御擲慮被為在度奉存候、尤為義ハ少々春以來癢氣の氣味合折々御坐候間、此頃温泉浴申候他申上候程の義にハ無御坐候得共、序故此段奉申上候、必御心頭に不被為懸様奉願候、恐々不備

五月廿日

密呈

内容 一、為(菊池為三郎)・庄(庄兵衛)、(第十二号「二五」註①)の近況

六八、(参考書翰) 嘉永二年十月一日 伊達宗紀書翰、徳川齊昭宛

\* 『事修叢書 九下』所收、但し、同前。

『藍山公記 卷十九』嘉永二年十月一日条所収

(1)

別紙謹呈仕候、然者下曾根より一封、乍恐奉拜上度、從浦賀頼越候間、御内々御手元迄差上度奉望候、委細上書ニ而御承知も可被遊と奉存候、私へも同書差越、彼ノ方之趣申來候処、甚以御手薄之由、同人殊之外心配仕候、彼辺之繪図差越候間、不取敢先奉入 電覽候、御写し等被為済候ハ、又御序御返却被成下度、乍憚奉願上候、至而萬事御不備候よし、御預之大名ニも手当向一向不行届兼候様子ニ相聞へ候事ニ御坐候、段々下曾根同書ニ而承候所ニ而ハ、如何にも御手薄ニ而、如何致し候而、右様御手薄之所を其儘被差置候事哉、難解事ニ候、奉行杯も過日之口内ニ而ハ色々申立も仕候様子ニ御坐候処、一向御裁許も無之、様子一向ニ合点参り不申事ニ御坐候、今ニも何事一事御坐候時ハ、扱々恐入候事ニ御坐候、不入私共心配ニ御坐候得共、御不安心之至ニ重々恐入候事ニ奉存候、過日被成下候 尊詠之通りニ相成候事候半歟を誠ニ以恐入候事ニ御座候、ケ様之義申上伺候処も、甚卒爾恐入候事ニ御座候得共、不顧失敬、

乍憚奉伺上候、過日ハ 御成も御座候而、萬事無御滞相濟、恐悅奉存上候、何等其節抔當時之趣 上聞ニも被仰上候御事ニも御座候哉、甚恐入候事ニ候得共、 上ニ而も當時之所御承知被遊候得者、其儘ニ被成置聞しく義と乍恐奉存候、如何被為在候事哉、甚多罪之至恐入候得共、此段御内々奉伺上候、何卒御備向等之義、今一段何等之御沙汰有之度事、不入事候得共、深く御為御氣支上候所よりハ奉存候事ニ御座候、少々手痛調筆別而不束之至、落字等恐入奉存候得共、及延引候而ハ如何敷、乍不束上書仕候間、幾重ニも御海恕之程奉願上候、恐々頓首、已上

十月一日

内容 一、下曾根金三郎よりの封書を廻す。浦賀辺の警備の手簿を案ず、絵図も附す

一、沿岸警備強化の爲の助言を依頼

(2) 別紙(1)(下曾根金三郎報告)

乍恐極密ニ奉入 尊聞候、私義浦賀表組之者江砲術教授并御警衛御用被 仰付、冥加至極難有仕合奉存候付而は、  
乍不及 国家御為ニ相成候様、日夜凝心魂海防之儀相考申候処、何分当所土地不宜、莫大之御入費無御座候而は箇相<sup>(因カ)</sup>  
守候儀出来不申、先湊幅三町計、奥行拾貳町計、三方山々時候て、麓より海岸迄広所三拾間位、狭所十四五間、東西  
共諸商家建連、寸地茂無之、往還三間或は貳間、何れへ出入仕候ニも山道狭險阻之所多、騎馬甚難儀仕、経路ニ至候  
てハ、老人步行茂難洪仕候場所多く御座候、千代崎御台場ハ奉行屋敷並組屋敷より凡十貳三町相隔り、其内七町計は  
平根山越仕、尤足場不宜山坂ニ而、甚敷惡路ニ御座候間、右山を越候計ニ而、身心相勞、急速之用ニ相立かたく、且  
御台場西洋風とハ乍申、更ニ無用之造方ニ而、若異船よりボンベ玉一発被打放候ハ、微塵と相成可申、殊ニ筒居方  
不宜、夫而已ならず、余り海岸近く低過申候間、落打ニ被仕候ハ尤危く、且又人数等繰出候節は何人出候と申儀、舟

中より明白に相分申候、右様之次第第二御座候間、異船湊内江乗込、又久利浜江上陸仕候儀、何寄安く砲銃茂不用、音楽ニ而乗込可申候、何分ニ茂御筒も少く、組中人数百八人有、万一之節は処々江固ニ罷出、全残人数二十八人、夫茂幼少、老人を残役に相成申候、御台場江詰候而茂漸四五挺之筒江配当仕候儀ニ有之候、先凡右之通之御手薄ニ御座候間、何分片時も安堵不仕、昼夜歎息而已仕、奉行江茂種々防禦之次第申談、差当り候急務之所而已書面ニ仕、奉行迄差出申候処、早速右書面閣老江相逢候由ニは御座候得共、一向披見も不仕候哉、只留置ニ相成、何之沙汰も無之、当所之事ハ虚構無之、奉行共額集、只心配仕居申候、何故 公辺ニ而者御打捨差置候哉、不肖之私共にハ 公慮之広大成儀は難量御座候得共、何分碌々と仕、今日を送候御時節ニ無御座、乍不及茂徹忠尽し精勤仕度奉存候得共、申立候廉は御取用ひ無之、未タ忠魂之不尽所ニ候哉と、只我不知短才を恨候より外事無御座候、左候とて、黙々と仕、公命之下るを相待居、何日迄茂此儘にて差置候而は、当所之者ハ皆殺ニ相成可申候、夫を覚悟之事にハ御座候得は、少茂身命落候義ニは無御座候得共、夫ニ而江戸之御防ニは相成申間敷、封死之後、江戸海江乗込乱妨仕候ハ、全犬死ニ相成、残念千萬之儀に奉存候、又四家之大名共は安閑ニ仕、少しも国家之御為を思、警衛手厚く仕候様子ニも無御座、万一之節ハ御用ニ相立可申とハ不奉存候間、只々心配仕候より外他念無御座、如何仕候ハ、御警衛向ニ御手厚ニ相成可申哉、乍恐国家之御為に思召被為付候御儀茂被為入候ハ、小臣之寸忠茂相立候様、極密御教示遊し被下候様、恐々慎而奉願上候

奉

厂木小臣拝

御警衛之大駄

一 砦御造営

一 軍艦大小数艘

一 台場築立



附、大砲鑄造、小道具・玉葉共

一 八王子千人同心五百人、当所移替

久利浜住居ニ而御台場其外警衛

一 年々軍金尅万両ツ、御下ケ

内容 一、浦賀表にて砲術教授にあたる厂木（下曾根金三郎信敦）の意見と報告

一、浦賀千代崎台場（浦賀南側の小突起先端）は地形上役に立たず、船から攻撃を受けやすし

一、従つて久里浜には容易に上陸可能、防備人数をそちらへ移すべし

一、八王子千人同心による久里浜警備の計画

（3）別紙（2）（嘉永二年五月五日、老中阿部正弘達書）

酉五月五日、伊勢守御直三奉行へ御渡

近年異国船致渡来之处、昨今年は、西北海・対州・南部・津軽、都而奥羽之間、松前辺夥數通航いたし、折々は上陸等もいたし候得共、指て之儀も不申出、薪水・食料等与候迄にて出帆致候事ニ候へ共、其度沿海諸家に於てハ、人数等指出、此表へ之届等、雜費も不少趣ニ相聞、比年如此にてハ諸家勝手向へも相響、可及困窮、左候迪、守衛之儀等閑ニハ難相成事ニ候へハ、追々難渋ニ相成候ハ、自然賦斂も重く可相成事にて、終ニハ領内疲弊ニも至り、上下不和合の基に相成候時ハ、不容易事ニ候処、今年ハ長崎表へも亜墨利加船渡来、松前より送りニ相成候漂流夷人共請取、帰帆候へ共、定而右御礼抔と唱、尚又渡来可致も難計、又此程浦賀表へハ啖咭利船渡来、右ハ外ニ趣意も無之、此地へ見舞罷越候趣、和語を以申聞、其外申出之口上容体等も、殊之外輕蔑・侮慢之情態ニ有之由、其上薪・水等相与候へ共、受取出帆之上、猶又下田表へも罷越、上陸測量等いたし候哉ニも相聞、大嶋へも亜墨利加船ニ候哉罷越、是又

上陸致候由、夫のミならず、沖合ニハ類船も相見へ候由、打連、沿海処乗歩行、測量等いたし候事ニも可有之哉、風説ニ候へ共、啖咭喇船中ニは、日本人・唐人抔も乗組居候やニ相聞、旁以當時の成行にてハ其儘指置候ハ、愈蔑視致、驕恣傲慢之所業ニも及可申候哉、左候時ハ、御国体ニも拘り候義、何分其儘打捨置可申筋無之候間、文政之度之如く、猶又打払之義被仰出可然と存候、乍去先年打払之義相止、格別御仁恤之御処置可有之旨被仰出候段、阿蘭陀甲比丹へ被仰渡、西洋諸国へも演述有之事ニ候へは、唯今彼国々により庶立候、格別不義非法も無之処、俄ニ御改革有之候も、却て争端を披キ候様ニも可相成、又夫ニ付ても、第一先此方沿海之守備不相整候てハ、万一此後夷賊戰艦等を以及渡来候節ニ、攻撃防禦之術行届申間敷事ニ付、先此段を諸家へも相達、守衛之備整候上にて、彼方之不義非法を押へ、弥打払之義可被仰出敷、乍去機會時勢抔とていつ迄も此儘指置候ハ、愈輕蔑侮慢超過いたし、御国威にも拘り、諸家之難渋、沿海のみならず、御国中之疲弊衰耗ニも至り候時ハ、実以不容易事にて、深く痛心いたし候事ニ候条、此後御処置之計画、利害之当否、後弊等無之、永不御安心ニ相成候様、各存寄を不殘、此度之儀ハ銘々より各通にて可被申聞候、尤聊忌諱嫌疑等顧念無之、存意一杯之处可被申聞候、只今時勢にてハ、先達而中申達候通り、一月後候へは一月たけ、二月後候へハ二月丈之御油断にて、万一其内又々渡来等度々ニ及候へハ、夫たけ之御損ニ相成、御国威ニも拘り、諸家之難渋も相重し、万一夷賊共より不法ニも及候時ハ、差誤有之間敷共難申存候へは、猶又御失策にも可相成事ニ候、篤く勘弁之上、早々可申聞候

右ハ畢竟此節の時務ニ於て之御国計、大切之儀と存候へハ、実ニ寤寐反側にも及候程之儀にて、是を氣運に托し、時勢ニ委ね、恬然拱手して居なから御国中之衰弊ニも可相成儀を度外ニ置候様にてハ、何共恐入候事と存候、於各も同様之意ニ可有之間、篤く勘弁、考究之上、忌諱不敬ニ涉り候事たり共、聊無遠慮、了簡之程勿々可被申候事

内容 一、老中阿部正弘は、三奉行以下、海防掛、及び長崎・浦賀兩奉行に、異国船打払令復活の可否を問う

六九、(参考史料) 高野長英筆「砲台土図」(図面は見当らない)

\* 宇和島伊達文化保存会所蔵、原本。「名士書簡 一」巻子(七点収む)より。「申字題」とあり、宇和島藩士鈴木護(号申宇)の収集にかゝるもの

砲 場 土 図 三十三分一

一 攻城超発砲台

シヤクリウチ

左側より  
第一番

○胸牆内、端ノ高サ上面の蓋、束柴ヲ除キ貳寸五分、同外端の高サ貳寸二分、厚サ六寸にて都合牆外壘丈貳尺実ハ七十間計之処  
ノ処にて、平地と同じく一線ヲなし申候

○櫓の束、柴ヲ貫キ候者ハ、元来束柴一束に付九本ツ、之処、三本ニ減少致候、掟索井ニ掟柴ハ略し不申候、尤繫キ  
繋り方ハ省略致、別段ニ仕掛入御覽候

○砲眼之処、内口の深サ六分、外口三四寸、下ノ処ハ三寸、上之処ハ三寸五分に開キ、斜発し為に便利に致候、其外  
口之方次第ニ高く、坂の如クに致し候ハ、シヤクリウチに而候ゆへ、此処ヲ丈夫に致し候、工夫ハ此分割元来十五  
度の傾度ニ致候筈之処、束柴綱合方見能キ為メニ十度と仕候

○望道ハ牆内の平地砲手井砲車等有之候処の綱名ニ候。此処の深一尺

○内坂の坂ノ傾度七分、此ハ砲車の輪と砲口ノ突き出、砲眼に入候、定尺ニ合し候、土大抵此割合ニ候

○外坂ノ傾度、二寸貳歩ニ致し、四十五度位ニ致候ハ、土崩レズ、又敵兵急ニ此ニ登リ難キ様ニ致し候

○牆前平路、深一寸、此ハ牆の外面の土崩れ落候節、直ニ塹中ニ入不申為、且ツ胸牆築造の節、匠夫此処ニ登リ居、  
土ヲ積ミ為の便利ニ致し候

○塹ハ深ハ極リ無之、只塙ヲ築、候土を掘出し候為メ歟、又其跡ヲ敵の寄難キ様ニ致し候事、且其高低厚薄に準し申候、深サハ大抵貳寸位と致し候、前後。両側。岸の傾度ハ大抵四十五度ニ致し、前岸の二面に柵ヲ樹へ、平地の処ニ遮探ヲ設け候ハ、一定ノ法にて御坐候

○砲と砲の隔タリハ、五寸七合、此ハ尤狹キ極度ニ候、土地広キ付ハ六七寸にも致し、宜敷由

○隔塙ハ、敵か横に數砲ヲ被繫不申為メニ造り申候、傾度ヲ急ニ致し候ハ、内面突地狹ク不相成為ニ候、其架サハ大抵八寸、又ハ一尺計りにて、其高サハ胸塙と同様ニ候、大抵此上ニ廬木ヲ設ケ、屋根ヲ製し、此上に土一寸ヲ置キ、

平時又ハ雨日等、砲ヲ此処ニ居合、砲車も此処ニ引籠候事も有之由

○藥丸倉ハ、砲貳門に塙座の割にて、大抵此塙後ニ造り候、尤地面乾キ水氣少ナキ処にてハ、土中に掘り窟と致し候、水氣有之候節ハ、地上ニ設ケ申候、見易キ為メニ此土図にてハ地上ニ造り申候、元來別段ニ木にて倉ヲ造り置候事ニ候得者、急之時節にハ筒籬ニ束柴にて、其四方より屋造ヲ造り、其上に土一寸ヲ積ミ、屋根の勾配ヲ四十五度となし、其四辺ニ水竅ヲ掘り、雨水停留不仕様ニなし、入口ハ喰違ニ致し、戸ハ筒籬、又ハ戸にて製し、此内ニ火藥櫃ヲ入置、昼夜十貳時の間、放砲ニ足候位ニ火藥ヲ貯置候事

又、ホウウキツ、ルとモルチイルハ、別に又此倉ヲ造り候事ニ候、此ハボンベン・カラナードの如キ、別製の彈丸ヲ貯候ゆへニ御坐候

註、嘉永元年四月一日、伊達宗城の命を受けた富沢礼中らの手引きで宇和島に入った高野長英は、宗城の命で蘭書の翻訳にあたり、嘉永二年正月中には離れて、琴平、広島を経由して鹿児島へ行き、八月には江戸に戻っている。長英の宇和島滞在中の訳業については、佐藤昌介『洋学史の研究』（一九八〇年十一月）の第三章が、最も新しい成果を提供してくれる。長英関係の宇和島伊達家史料は、これまで第十三号「三五（一）・（二）」の「書籍目録」を参考史料として紹介したが、ここにもう一点彼の自筆文書を紹介しておく。『高野長英全集』には載録されていない。

（嘉永二年分未完）

本稿は、「昭和五十三～五十四年度文部省科学研究費総合研究Ⅱ」の成果の一部である。

（一九八一・十・十四）